

日本のモダニズム建築試論

Notes on Japanese Modern Architecture

木村 泰昌*1

Yasumasa KIMURA

要約 本論考は、建築分野を中心にしながら、「日本の近代化とは何であったか」を明らかにする試みである。まず、歴史的視点から明治以降の近代化の流れを概略し、今日の状況を把握した。つぎに、いくつかの著書からヒントを得て、日本のモダニズム建築を通して近代化の様相、生活様式と生産様式における近代化の光と影、めまぐるしく進展する科学と技術を見据えた今後の職業能力開発、を主要項目として考察し、論じる。

1 はじめに

明治の新政府が意図したことは、天皇を中心とする中央集権国家を築くことであった。そこで版籍奉還や廃藩置県などの政策を実施することで旧体制を完全に崩壊させ、中央政府による支配体制を整えていった。また今後の日本の行く末を見定めるために岩倉遣欧使節団の欧米視察に同行した大久保利通、木戸孝允らは、そこで発展し強大化した資本主義国家の姿をまざまざと見せつけられた。そして、日本を近代的な資本主義国家に築き上げる必要性を痛感して帰国した。以後、国力の要である「軍事力」と「経済力」の充実に向け、「富国強兵」と「殖産興業」をスローガンに、軍事と経済を重視した国づくりへと突き進んでいった。

明治、大正、昭和の時代を通じ、いくたびかの戦争を経て、昭和20年8月15日に太平洋戦争が終結した。終戦後は復興、高度経済成長、バブル崩壊、リーマンショックを経験して、今日に及んでいる。時代も昭和から平成へと移り、暮らしも電化から電子化へ変化し、コンピューター、携帯電話、スマホなどの普及により、情報化社会の進展が著しい。とりわけ、終戦直後の数年間にわたるアメリカの占領政策は日本のアメリカ化をもたらし、主に生活と文化の面において大衆の意識に大きな変化をもたらした。

日本の近代化は西洋化であった。江戸時代を否定するところから明治は始まった。そこには、モダニティ（近代）という精神があつて、それを広めようとするモダニゼーション（近代化）という動きがはたらきながら、モダニズム（近代様式）というものを生み出して現在に至っている。近代建築もこの中にある。

今日、通勤途上での車内風景は、多くの人々が携帯機器を見つめている姿である。身の回りは、ますます人工的になり、自然から意識が離れ、世の中から身体感覚が欠如しつつある。これを解剖学者の養老孟司は、脳化社会と呼んだ。

2 モダン・ムーブメント

2-1 世界の動き

モダン・ムーブメントすなわち近代建築運動は、1900年頃に始まり、合理主義をベースに、科学技術を信頼しながらその成果を建築に反映させようとした動きである。合理主義は理性を全面的に信頼するところがあり、いま目の前にある問題は人間の理性によって解決できるというオプティミスティックな考え方につながる。当然、社会を改革しよう、改革しなければならぬという意欲が強くなる。それは住宅地開発や、都市計画にも反映された。また、合理主義は普遍性を重視するので、最新の科学技術を活用することにも前向きであった。鉄とガラスとコンクリートでつくられた20世紀の建築、これをモダニズム建築と呼ぶ。

ヨーロッパでこの潮流を率いた建築家は、フランスではル・コルビュジエ、ドイツではバウハウスで活動したヴァルター・グロピウスとミース・ファン・デル・ローエである。この3人は巨匠と呼ばれている。

2-2 日本の動き

明治以降、日本の建築は西洋の古典様式を摂取し続けてきたが、大正初期、日本にもアール・ヌーヴォーやゼツェッションなどの新しい造形活動は紹介されて

*1 住居環境科
Department of Housing Environment

いた。その影響から、1920 年 2 月、帝国大学を卒業する石本喜久治、堀口捨己、滝沢真弓、矢田茂、山田守、森田慶一の 6 人で分離派建築会というグループが結成された。日本最初の近代建築運動といわれている。その後、これまでの歴史主義の様式とは全く異なる新しい建築が次々と生み出されていった。分離派とは、過去の様式から決別するという意味である。ここに、日本のモダニズム建築の幕が開けた。

3 日本のモダニズム建築

3-1 鉄道施設

(1) 東京駅

設計者は辰野金吾 (1854~1919 年) である。日露戦争の勝利をきっかけにして、国家の威信の象徴として建設が意図された。1914 年竣工。1923 年 9 月 1 日関東大震災に遭遇したが、鉄骨レンガ造であったため、ほとんど損傷を受けず、被災者の避難所にもなった。1945 年 5 月 25 日の空襲によって大半を焼失したが、1947 年 3 月応急措置的に復興された。2012 年 10 月、当初の完全な姿に復元保存された。モダニズム建築が始まる直前の様式建築である。

さて日本の鉄道史を概観する。明治期に新橋・横浜間の開通を第一歩として、ほぼ全国の幹線網が完成された。日露戦争後、鉄道国有法により私設鉄道の買収が実施され、明治末期においては全国の鉄道の 9 割余を官設鉄道が占めることになった。大正期に、第一次世界大戦を契機とする国内経済の飛躍的な発展に伴い、鉄道事業も急成長をとげた。鉄道省が設置され、総合的な鉄道行政が敷かれた。昭和期には、都市化の進展に伴い郊外電車網が整備され、その初期にほぼ基礎が完成した。日華事変を契機として鉄道輸送も戦時体制に組み込まれた。太平洋戦争を経て、戦後の混乱はあったが、昭和 24 年 6 月 1 日、国有鉄道は公共企業体として改組され、「日本国有鉄道」の名称で発足した。その後、昭和 62 年 4 月 1 日、分割・民営化された。



写真 1 東京駅 (復元保存)

(2) 田園調布駅

通勤通学手段である鉄道の建設と郊外住宅地の開発を組み合わせる手法の例として、阪急電鉄の池田室町、東急電鉄の田園調布、東武鉄道の常盤台がある。

日本の代表的高級住宅地である田園調布のシンボルが、その駅舎である。設計者は矢部金太郎 (生年不明~1976 年) である。1924 年竣工。木造モルタル塗りの 2 階建て、ドイツ民家風の大正モダンのデザインが特徴である。駅地下化のため 1990 年に解体されたが、市民の強い要望により 2000 年に復元された。



写真 2 田園調布駅 (復元保存)

(3) 京都駅

JR 京都駅。設計者は原広司 (1936 年生) である。1997 年竣工。駅施設、ホテル、劇場、商業施設、駐車場などの複合ビルである。全体は大きく 3 分割され、ホテルと劇場の部分、巨大なコンコース部分、大階段と商業施設の部分で構成されている。このような手法を、平面的にはゾーニング、立面的には分節と呼ぶ。新幹線の車窓からも見ることができる。

この設計者の他作品は、ヤマトインターナショナル (1986 年)、那覇市立城西小学校 (1987 年)、新梅田シティ梅田スカイビル (1993 年) などがある。何れも、理知的な建築である。



図 1 京都駅

3-2 通信施設

(1) 東京中央郵便局

日本の近代郵便制度は、東京・京都・大阪間において郵便業務の取り扱いが開始された1871(明治4)年にはじまる。翌年、北海道の一部を除く全国で実施された。1873(明治6)年には、全国均一料金制が導入された。さらに1883(明治16)年、郵便条例が制定された。名実ともに、近代郵便制度として運営できる体制が整えられたのは1885(明治18)年であった。この年、逓信省が創設され運営をになった。

東京中央郵便局は1931年竣工。大阪中央郵便局は1939年竣工。設計者は吉田鉄郎(1894~1956年)である。逓信省営繕課技師。彼らにより、逓信省建築の礎が築かれた。惜しくも2012年、高層のJPタワーに建て替えられたが、低層棟で一部復元保存された。



写真3 東京中央郵便局(一部復元保存)

(2) 東京中央電信局

1925年竣工。設計者は山田守(1894~1966年)である。逓信省営繕課技師時代の作品。モダニズム建築前夜、分離派の建築を象徴するものとなった。

用途は電報を扱う電信施設である。開口部や柱頂部にパラボラアーチを並べ、全面に白いタイルを張った斬新なデザイン。1968年、残念ながら解体された。

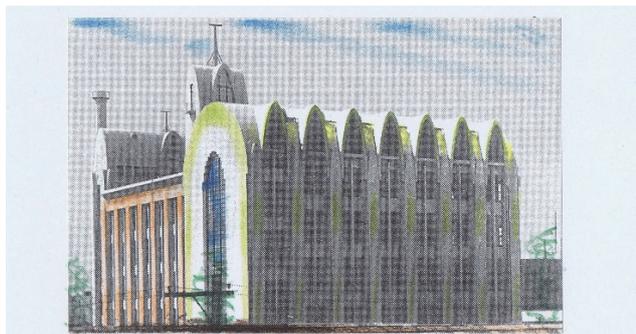


図2 東京中央電信局(解体)

(3) NTT ドコモ品川ビル

電信の重要性を認識した明治政府は、電信の官営を決定し、1869年に東京・横浜間で電信サービスを開始。1890年には東京・横浜間で電話サービスを開始した。逓信省、電気通信省と官営で行われた電信電話事業は1952年に日本電信電話公社に引き継がれた。その後、通信の自由化を背景に民営化され、日本電信電話会社となる。NTT 東日本、NTT 西日本、NTT データ、NTT ドコモ、NTT コミュニケーションズ等が設立され、グループ化した。一般呼称はNTTである。

1990年代に普及した携帯電話は、2000年代に入り加入者数で固定電話を追い越した。このNTT ドコモ品川ビルは、ネットワークオペレーションセンター。2003年竣工。設計者はNTT ファシリティーズである。その姿の連想から、ガンダムビルと呼んでいる。



写真4 NTT ドコモ品川ビル

(4) NHK 千葉放送会館

放送の歴史を概略する。1925年にラジオ放送開始。1926年に社団法人日本放送協会発足。1932年には、聴取契約数100万突破。1950年、NHKが放送法に基づく特殊法人となる。1953年、テレビ放送開始。1960年、カラーテレビ放送開始。1989年、衛星放送開始。2003年、地上デジタル放送開始。NHK本部は、NHK放送センター。公共放送で受信料制度である。民間のラジオ・テレビ放送は1960年代に始まった。

この千葉放送局は県内向けにFM放送を行っている。2011年竣工。設計者は株式会社日建設計である。



写真5 NHK 千葉放送会館

3-3 業務施設

(1) パレスサイドビル

資本主義経済の発展により大量の工業生産が可能となり、工場や倉庫の管理や発注業務といった生産機能の支援を行う場所が必要となった。オフィス(事務室)の始まりである。やがて分離独立して専用のビルとして街の中心部に建設されるようになった。

明治から昭和前期までは、人口照明設備や冷暖房の空気調和設備が現在のように十分でなく、建築計画においては自然採光と通風の確保が必要な条件となっていた。1950年以降になると、蛍光灯などの有効な人口照明や冷暖房設備の導入で、かならずしも自然採光や自然通風によらなくてもよい平面計画となってきた。

壁や柱に邪魔されない「何もない」オフィス空間は、多様な要求や間取りに対応して利用できる柔軟な空間であることから「ユニバーサルスペース(普遍的空間)」と呼ばれた。このような合理的で、経済性を重視したオフィス建築のプロトタイプ(原型)が、1950年代に誕生した。

パレスサイドビル。1966年竣工。設計者は日建設計の林昌二(1928~2011年)である。高さ制限31mという旧制度化で計画された。都市の景観を守り育てる建築として存在感を示している。



写真6 パレスサイドビル

(2) ランドマークタワー

エレベーターの垂直搬送技術、エアコンの空調技術、柱と梁のラーメン構造からなるグリッド・フレーム、この三位一体により高層建築が可能となった。さらにコンピュータの高速な進化により、高度な構造解析技術が進展し、超高層建築が実現するまでになった。

施工面では、ブルドーザー、パワーショベルなどの汎用的な土木機械が国産化され、掘削工事の機械化が進展した。1960年代にタワークレーンなどの揚重機械

が国産化され、高層ビルの建設がさらに容易になった。また、生コンクリート工場が各地に建設され、コンクリートポンプ車による生コン圧送が可能となった。

1968年、超高層の曙といわれた霞ヶ関ビルディングが完成する。地上36階、地下3階、高さ147mを誇る鉄骨造のオフィスビルであった。オフィスワーカーの誕生を象徴する建物となった。

1993年、地上70階、地下4階、塔屋3階、高さ296mのランドマークタワーが完成した。設計者は、三菱地所設計である。地下から地上8階まで鉄骨鉄筋コンクリート造、地上9階以上は鉄骨造である。建物上部には、170tのおもりを特殊な振り子で支える制震装置が採用されている。用途はオフィス、ホテル、ショッピングモールの複合施設である。



写真7 ランドマークタワー

(3) パシフィックセンチュリープレイス丸の内

2001年竣工。設計者は、(株)日建設計と(株)竹中工務店である。地上32階、地下4階、塔屋1階。高層部はオフィスだが、低層部はホテルと店舗群が配置された複合施設である。鉄骨とガラスとコンクリートで造られた現代建築の、まさに典型である。とりわけガラスのカーテンウォール(外装材)が特徴である。



写真8 パシフィックセンチュリープレイス丸の内

3-4 生産施設

(1) 秩父セメント第二工場

1956年竣工。設計者は谷口吉郎(1904~1979年)である。公害の原因となっていた塵埃に対する考慮から密封式が採用された。同時に騒音、衛生、緑化にも配慮され、気持ちのいい生産環境の実現を期し、生産・機械・建築設計・施工の技術者たちの合作となった。日本建築学会作品賞を受賞。

資本主義が進展し様々な産業が生まれた。生産手段としての工場も多様化した。高度経済成長を牽引してきた電機産業や自動車産業でも、機械時代にふさわしい工場の姿が実現している。遠く明治を振り返れば、1872(明治5)年、富岡製糸場が完成している。

(2) 発電所

1882年東京の銀座に電灯が灯る。1886年初めての電気事業者として東京電灯会社(東京電力の前身)が開業。1887年日本初の火力発電所が誕生。1892年、日本初の営業用水力発電所、京都市営蹴上発電所完成。1963年、火力(975万kw)が水力(944万kw)を超え、日本の電源構成が火主水従となった。1971年、東京電力・福島第一原子力発電所1号機が運転開始。

3-5 教育施設

(1) 復興小学校

近代教育制度は、1872(明治5)年の学制に始まる。1886(明治19)年には、小学校令で義務教育という言葉が使われ、尋常小学校を卒業するまでとなった。

学制に伴い各地に木造の小学校が出現した。東京市では1923(大正12)年の関東大震災による復興事業として鉄筋コンクリート造の校舎が100以上も建設された。これを復興小学校と呼ぶ。1931年で終了するが、アーチ形の窓などドイツ表現主義の影響が見られる。

(2) 改築小学校

戦前、木造から鉄筋コンクリート造への建て替えもあった。これを改築小学校と呼ぶ。1938年まで続くが、シンプルな白い箱というバウハウスの意匠が特徴である。国家発展の基礎として、教育が重視された。

3-6 文化施設

(1) 東京文化会館

1961年竣工。設計者は前川國男(1905~1986年)である。交響管弦楽から室内楽に及ぶ音楽の演奏会場として世界のどんな施設と比べても恥ずかしくない、

音楽の殿堂であるといわれている。

明治以降、西洋音楽は初め軍楽隊によって取り入れられ、次いで唱歌という形で教育の分野に摂取された。大正時代にはレコードの普及に伴って流行歌が生まれ、音楽は大衆のなかに浸透していった。昭和に入ると、ラジオの誕生により、様々な音楽が全国へ発信された。滝廉太郎(1879~1903年)や山田耕筰(1886~1965年)らが、そのパイオニアである。



写真9 東京文化会館

(2) 彩の国さいたま芸術劇場

1994年竣工。設計者は香山壽夫(1931年生)である。地域の文化創造活動拠点を目指し、専門性を有する中・小規模の劇場・ホールならびに創造活動を支援する稽古場・工房・練習室をもっている。2006年から蜷川幸雄(1935~2016年)が芸術監督だった。

さて1924年、小山内薫と土方与志によって新劇の実質的な出発点といわれる築地小劇場が創立された。戦後は文学座、俳優座、劇団民藝の三劇団が中心となったが、リアリズム演劇から抽象演劇へ展開していく過程で、新劇団の出現や既存劇団も離合集散し再編成が起こった。他方では、ミュージカルの隆盛もある。

3-7 競技施設

(1) 国立競技場

1958年竣工。1964年、第18回東京オリンピック開催ため観客席増設と聖火台が設置された。設計者は建設省の角田栄(ツダ・シゲル1913~1993年)である。戦争からの復興と国際社会への復帰という、平和への願いが込められた大会であった。

2015年、新国立競技場建設のため解体された。

(2) 国立代々木競技場(旧 国立屋内総合競技場)

丹下健三(1913~2005年)は戦後日本を代表する建築家であり、1964年の東京オリンピックで中心施設

となった国立代々木屋内総合競技場の設計者である。第一体育館は競泳、第二体育館はバスケットボールの競技施設となった。戦後の復興を象徴する存在であり、日本が世界に誇る傑作といわれている。1964年竣工。

この建物の優位性は、なにより「かたち」である。鉄筋コンクリート造、鉄骨造、とりわけ高張力鋼を用いたサスペンション構造（吊り構造）の造形にある。これを建築史では、構造表現主義と呼ぶ。



写真10 国立代々木競技場

3-8 居住施設

(1) 独立住宅

木造モダニズムの先駆的事例を三つ上げる。

第一、紫烟荘。1926年竣工。その後焼失。設計者は堀口捨己（1895～1984年）である。壁は純白、底は水平というモダンデザインに、一部を茅葺きの屋根にしてインテリアは茶室ふうという、和風を巧みに取り込んだ事例。茅葺きのむくり屋根は、世界遺産であるイタリアのアルベロベッロの町並みで見るとゥルツリと呼ばれる円錐形の石屋根住居を連想させる。



図3 紫烟荘

第二、立体最小限住居。1950年竣工。戦後の建設資材が不足する中、玄関の省略、通路と居室の融合など、一つの原型を示した。特に吹き抜けの空間容量によって狭さを補おうとする立体的発想は、多くの小住宅の先駆ともなった。さらに、畳の和室もなくなっている。設計者は池辺陽（1920～1979年）である。



図4 立体最小限住居

第三、軽井沢の山荘。1963年竣工。鉄筋コンクリート造の箱の上に、片流れ屋根の木造居住部がオーバーハングして載る構成は、この山荘から始まる。和室はない。設計者は吉村順三（1908～1997年）である。



図5 軽井沢の山荘

(2) 集合住宅

時代を画した事例を三つ上げる。

第一、同潤会アパート。関東大震災の翌年、1924年、義捐金を元手の一つに加え、被災者のための授産と住宅供給を目的とした同潤会が設立された。耐震と防火の観点から鉄筋コンクリート造の集合住宅形式が採用され、東京深川の猿江裏町をはじめ、下町方面や横浜でいくつものスラムクリアランス事業を行った。さらに標準よりやや下の層の底上げをねらって山の手にも展開し、青山や代官山のアパートメントハウスなどを完成させる。さらにサラリーマン層への住宅供給に取り組み、働く女性のための大塚女子アパートメントハウスやエレベーターと風呂付の江戸川アパートメントハウスなどを手がけた。その後は職工向けの木造平屋の住宅群の応急建設や農村の民家の改良へと進み、1941（昭和16）年に解散した。

第二、日本住宅公団による団地。1955（昭和30）年に日本住宅公団が設立され、本格的な住宅供給が始まる。以後、各地に団地が誕生した。1956（昭和31）年に民間分譲マンションが初めて販売されたが、1960年代以降になると次々とマンションブームが到来した。1962（昭和37）年、建物の区分所有等に関する法律

(区分所有法)が制定され、それまでの民法だけによる一般的な対応から、法的な位置づけが明確にされた。

第三、広島基町高層アパート。この高層アパート群は長らく被爆地広島を中心部に残されていた木造平家の応急住宅や原爆スラムと呼ばれた不良住宅街の解決と中央公園の建設を目的に計画され、広島県と広島市の共同再開発事業となった。1969年に着工し、七期にわたる工事によって1970年から1978年にかけて竣工。設計者は大高正人(1923~2010年)である。社会をより良くするため現実と格闘した建築家の良心がある。

4 近代化の光と影

4-1 生活様式における光と影

私たちの暮らしは、1955年頃から大きく変化した。最初にガス釜が普及し、次は電気釜が普及した。このエネルギー革命で、煮炊きを土間でしなくてもよくなり、台所が床の上にあがった。また、座式から椅子式へ移行し、ダイニングキッチンが誕生した。畳の和室も減り、洋室が主流となった。近代化の当初に憧れた西洋の生活様式がここに完成した。これが光である。

日本の伝統的な住まい方の特質は、何も無い空間に道具を持ち込んで、用途に合わせた使い方をすることであった。西洋では、部屋は機能別に分けて考えられ、居間はいつも居間として、食堂は常に食堂として使われた。日本の空間は流動性のある融通無碍のスペースで、そこに室礼(しつらい)をすること、つまり道具による演出をすることでどんな使い方もできるものだった。調度品や道具は普段はしまっておき、必要な時だけ出して使っていた。このような和の知恵が、今日ではほとんど忘れ去られてきた。これが影である。

4-2 生産様式における光と影

文化人類学者の川田順造(1934年生)氏はその著書『<運ぶヒト>の人類学』で、ヒトと道具との関係を三つのモデルで提示した。文化の三角測量と呼ぶ。

<モデルA=道具の脱人間化>

フランスの技術文化から普遍化。

第一に、人間の巧みさに依存せず、誰がやっても同じように良い結果が得られるように道具を工夫するという指向性。第二に、人力を省き、畜力、水力、風力など、人力以外のエネルギーをできるだけ利用して、より大きな結果を得ようとする指向性。

<モデルB=道具の人間化>

日本の技術文化から普遍化。

第一に、人間の巧みさによって単純で機能未分化な

道具を多機能につかひこなすこと。たとえば、箸や船を進める櫓が良い例。第二に、良い結果を得るために人力を惜しみなく投入すること。たとえば、限られた水田で、労働生産性は無視して土地生産性を上げるための、惜しみない勤労を推奨する価値観にみられる。

<モデルC=人間の道具化>

西アフリカの旧モシ王国の技術文化から普遍化。

槌子の原理と回転原理を応用した道具がない社会で、住民の身体特徴である長い前腕を、鍬の短い柄の延長のように用いる農作業など。

以上が、モデルA、B、Cの要約である。

ある目的を設定して、それを達成する最も効果的な手段を工夫するという、「目的指向」の価値観から西洋の近代合理主義は始まった。すなわちモデルAによる歴史の展開が、産業革命である。科学技術の進展とあいまって、都市化・工業化を推進していった。

日本では、戦後復興の過程で、都市部での工業化がものすごく伸びていった。人手不足が起きて、これが戦後の地方からの集団就職を促し、やがて核家族時代へと移行していった。地方の人たちが都会でどんどん世帯をつくっていくことで、世帯数が増えた。新生活が始まるとき家電製品一式を揃えることになり、それで内需が拡大した。高度経済成長に伴う暮らしの変化は、生活革命とも呼ばれている。

1960年代に農業人口が一気に減り、第1次産業から第2次産業、やがて第3次産業へ就業人口が流動する中で、社会が中流階級化していった。これは光である。

明治以降の日本の近代化に伴い、様々な公害が発生してきた。今日では広く捉え、環境問題と呼んでいる。概ね四つが指摘されている。第一、気候温暖化。第二、水資源の枯渇。第三、生態系の破壊。第四、生物多様性の喪失。これは影である。

4-3 文化における光と影

音楽は邦楽から洋楽へ、演劇は新劇が加わり、医学は漢方から西洋医学へ、その主流は移行してきた。様々なスポーツも輸入された。文化はますます多様化し、楽しみも多くなった。これは光の部分である。

建築においては鉄筋コンクリート造や鉄骨造が主流となり、木造は出番が少なくなっている。プレカットという工場での木材加工も導入され、継手・仕口の技を発揮する局面も少なくなっている。様々な分野において、このような伝統技能を生かす機会が少なくなっているため、技能継承が危ぶまれてきている。これが影の部分である。

5 今後の職業能力開発

5-1 技能遺産の保存・継承・活用

様々な伝統的スキルが集積されて出来上がったモノを、ここでは技能遺産と呼ぶ。技能はカタチとしても残さなければならない。

建築の分野では博物館明治村、川崎市立日本民家園、江戸東京たてもの園などの例がある。建築保存とは、古い建物の歴史的価値を損なわないように配慮しつつ、安全性を確保し、新しい活用の道を見いだして行こうという、困難ではあるが価値のある行為である。

平成28年度の総合制作実習において、日本民家園に移築されている旧作田家住宅を題材として、郷土資料なども参考にしながら論文をまとめた。学生の家族のルーツである九十九里を探るという意味合いもあった。タイトルは「旧作田家住宅 その時代」とした。

このように技能遺産として保存・継承・活用されることは、後世の人々の貴重な手がかりとなる。今後の職業能力開発を担う施設としても、技能をカタチとして残し、訓練のテキストとして活用することも重要ではないかと考える。

5-2 技能の保存・継承・活用

世界がますますグローバル化し、情報化社会へ突き進む過程で、消滅の危機に直面する産業がある。生産形態が激しく変化する中で、私達は市場原理を超えて、その種子を後世へ保存・継承・活用する使命がある。

例えば人形浄瑠璃。唯一の専門劇場であった文楽座は、1909年に松竹の経営となり、興行を続けてきた。戦後は興行成績が低迷。1963年に松竹は文楽から撤退した。紆余曲折を経て、1984年に国立文楽劇場が完成し、伝統芸能の保存及び振興が図られている。主体は独立行政法人日本芸術文化振興会。伝統芸能の伝承者の養成も行っている。

建築分野では、木造の伝統スキルがある。継手・仕口と呼ばれる高度な技。近年、機械のプレカット加工による工場生産に移行しつつある。職業能力開発施設としても憂慮すべき課題である。技能は人から人へ伝わるものである。長い間、徒弟制度の下で培われてきた匠の技は、少数精鋭のエリート集団が継続的な仕事をする中で、保存・継承・活用を担っていく事が残された道と考える。

6 日本の近代化とは何であったか

ペリー艦隊来航を契機に開国に舵をきった日本は、明治維新を経た後、富国強兵、殖産興業を国是とした。

西洋文明モデルによる国家の建設であった。文明開化とも呼ばれた。その基盤は、科学と技術である。

日本のモダニズム建築も、科学技術の信仰に基づいて展開されてきた。人間が如何様にも環境を創造できると信じた時代であった。その真骨頂は「先端に行く」ことである。前衛主義とも呼ばれる。

20世紀の特徴は、工業化と都市化が著しく進展したことにある。さらに自分たちの共通の過去である伝統を蔑ろにし、消し去ったことである。21世紀に入ると、これに情報化が加わった。環境は、ますます人工的に成りつつあり、私達の暮らしはその中に浸りきってしまった。近代を形にあらわした建築も、その責を負う。

仕事も、第1次産業から第2次産業、第3次産業、さらにIT産業へと軸足を移してきた。自然からますます乖離する労働の姿が見えてくる。故に近代化とは、自然への感性を失っていく過程であったと総括できる。

こうして科学と技術により社会構造が大きく変化し、暮らしも、日本人の働き方も劇的に変容してしまった。

7 おわりに

年度が終わろうとする頃、山陰で仕事をしていた私は、一日かけて実習場を清掃していた。夜の8時頃に職員室にもどると、同僚から「えらい事が起こった」と聞かされた。その日は、2011年3月11日。その後のニュースで、東日本大震災と知った。それから徐々に、科学技術への信頼も揺らいできている。これが、本論のモチーフとなっている。

2020年に再び東京オリンピックが開催予定である。新国立競技場のザハ・ハディド案が、白紙に戻された顛末があった。その根底には、21世紀の建築が前世紀のモダニズム建築を遥かに飛び越え、超モダニズムと呼ぶべき斬新なデザイン領域に踏み込んだ点も、その一因である。それは高度な情報技術が可能にした手法であるが、大衆の意識からはますます隔たり、共感を得ることを困難にしているのではないかと推測する。

本稿では、用途別に時代を刻んだモダニズム建築を取り上げ、日本の近代化の様相を概観した。たしかに、希望のあふれる時代もあった。しかし今日、単純には未来が信じられなくなった。それ故、皆が落ち着いて暮らせる環境が、切実に求められている時代である。

参考文献

- 1) 藤森照信：日本の近代建築，岩波書店，1993.
- 2) 松隈洋：モダニズム建築紀行，六耀社，2016.
- 3) 川田順造：<運ぶヒト>の人類学，岩波書店，2014.